九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

祭礼山車における山台デザインの変容に関する研究：博多祇園山笠ならびに北部九州の比較を通して

松内，紀之

https://hdl.handle.net/2324/4475227

出版情報：Kyushu University, 2020, 博士（芸術工学），論文博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

（様式６－２）

氏　　名	松内　紀之
論　文　名	祭礼山車における山台デザインの変容に関する研究～博多祇園山笠ならびに北部九州の比較を通して～
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　藤原　惠洋 副　査　　九州大学名誉　　名誉教授　石村　眞一 副　査　　九州大学　　准教授　　加藤　悠希

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本研究は、博多祇園山笠の祭礼山車における基礎部である山台の構造的特徴や形態的特徴に注目し、旧来の山笠研究の多くが舁き棒より上部の飾り付けの意味や祭礼成立過程を論じてきた盲点と言える山車の基礎山台に初めて視点を注ぎながら、その成立と展開の変容過程をデザイン史的観点から明らかにしたうえで、とくに舁き棒の取り付け方ならびに周辺の山台に関する木構造の形態的変化を実証的に検討しながら、俯瞰的な山台デザインの変容を跡つけたものである。さらに博多祇園山笠が北部九州へもたらした影響に関して、現在も存続する祇園山笠の山台間の関連性と変容を通して比較考察を加えていった。さらに 2016 年ユネスコ無形文化遺産に記載された 33 件の山車山台の特徴を変化を把握し、現在に至った要因と経緯についても明らかにした。

本論は８章から構成される。序章では関連領域の先行研究を通し概観される山車山台への知見が十分ではなかったことを批判的に跡付け、本研究の着想が独自の観点によることを明らかにした。

第１章では、管見する史料から見た場合、江戸時代初期と想定される博多祇園山笠黎明期を検討するうえで史料性を高く評価しうる『博多祇園山笠巡行図屏風』から、舁き棒の取り付け方と土台部分の木構造の関連を読み取っている。とりわけ舁き棒本数とそれを支える横架材の配置に注目し、上下横架材で挟み保持する方法が用いられていた可能性に言及した。

第２章では、現代に継続されている博多祇園山笠における山台の木構造部材組み立て作業と縄巻作業・ 棒締め作業の現場調査から得られた知見に立脚し、博多祇園山笠山車の構造的特徴を明らかにした。その結果、北部九州山笠は構造的特徴から６系統分類へ導くと同時に、空間的な特徴を通して福岡市・福岡県西部に数多く存続する博多系、北九州市・福岡県東部に数多く存続する京築系、中間の地域に存続する八幡系・筑豊系山笠の３分類に整理することができた。

第３章は山車山台の架構手法に関する技術史的考察を進めた。博多祇園山笠からの伝播や影響が想定される北部九州一帯に現存する山笠 40 基を実地調査した成果から、舁き棒の取り付け方と山台部分の木構造に基づいた系統分類を導き、博多祇園山笠がもたらす構造的特徴との比較考察を進めた。さらに博多祇園山笠祭礼期間の巡行時の山台が受ける衝撃による山台形状変化を数値的に計測したうえで、補強材としての八ッ文字について北部九州山笠を通した比較検討を行いその施工理由を考察した。

第４章は山笠における舁き棒取り付け手法に関する形態論的考察を進めた結果、打ち縄巻き・八ッ文字縄巻き・棒締めについて、筆者による調査検討に基づき独自に作成された豊富な図版によって施工過程を明示することで、北部九州山笠における舁き棒の取り付け方の変容過程と博多祇園山笠棒締めの原形を論証する中、山台組み立てが各部材配置のバランスを十分に考慮したものであったことや、博多祇園山笠と北部九州山笠を通した普遍的な共通性や影響関係を導いた。

第５章では、ユネスコ記載無形文化遺産「山・鉾・屋台行事」の 33 事例を概観したうえで、博多祇園山笠の形態的特徴と要因を考察した。その結果、博多祇園山笠ならびに北部九州の山笠には、山台を含めた山車の組み立て、巡行、山崩しといった一年間にわたる循環的な形態変化が存続することを明らかにし、とりわけ全国的にも希少価値が高いことを明らかにした。

第６章では、組織的に行われる祭礼準備と祭礼斉行状況を整理し、祭礼の発展が山笠巡行方法の変化ならびに山台の形態変化へ与えた影響関係を明らかにした。その結果、舁き棒本数の増加と長さの減少、山台を傾斜させた巡行方法への変容が追い山隆盛による巡行参加者の増加だけでなく、祭礼の組織運営や大人数による組織的な巡行とも深く関与することを明らかにした。

第７章は、以上の各章において得られた考察の成果をもとに博多祇園山笠の現状形態へ至る経緯と形態の変容を俯瞰し結論とした。同時に、実際の現地調査を通し筆者がみずから行った実測調査に基づく多数の山笠図面を付帯資料として提示することができている。

5354 年 5 月 43 日（水）49=63〜4;=33 九州大学大橋キャンパス 845 教室において公開発表会を開催したところ、会場聴講者（; 名）ならびに遠隔オンライン聴講者+: 名 千葉県、京都府、宮崎県等）の参加があった。発表会では、前半、発表者が以上の本論に関する内容を 78 分間にわたり口頭により発表を行なった。聴講者へ簡潔な手元資料が用意され、必要なパワーポイントも活用されたうえで効果的な発表であった。その後、主査、副査二名による質疑応答を経て、聴講者からも活発な質疑応答を行なったところ、いずれの質問に対しても十分な学識にもとづく適切な回答を得ることができた。

以上より、論文調査委員３名は本研究が導いた考察の成果を高く評価すると同時に、本研究領域へ向け新規に多数提示されたオリジナルの資料価値も高く評価したうえで、博士（芸術工学）の学位に値するものと判断した。